

## 通訳の多様性をめぐって

### ～ 「<sup>クラウン</sup>道化」に戻って

朴 和美（翻訳・通訳者）

昨年の夏、私は日本のNPO「女性の安全と健康のための支援教育センター」と「すぺーすアライズ」の共催による「カナダ夏研修」に（日英）通訳者の一人として参加した。一週間（8月3日～10日）にわたるこの海外研修は、暴力や虐待の被害にあった女性や子どもの支援に関わっている日本在住の女性たちを対象に企画されたものだ。プログラムは日本の事情に詳しいカナダ人コーディネータによって準備され、そして研修そのものはバンクーバー市ブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）内の宿泊施設とセミナー室を利用しながら行われた。参加者は26名で、年齢層は30代から60代にわたり、職種は看護師、社会福祉士、教師、児童福祉士、カウンセラー、牧師、臨床心理士、弁護士、医師などで、ほとんどの人たちがすでに専門職として支援活動に従事している。

プログラムにはBC州立「女性病院」への見学も含まれていたが、研修の大枠は、バンクーバー在住のカナダ人女性たちを招いてのレクチャー（講義）が中心だった。講師陣は、女性の地位向上あるいは女性や子どもに対する暴力や虐待を根絶するために活動している女性たち、そしてさまざまな専門領域で支援活動に携わっている女性たちだった。講義の内容は、これまでのカナダの多岐にわたる女性運動をめぐり理論と実践、そして現在女性たちが直面している反動的な動きまでを含んだ、非常に密度の濃いものだった。2000年以降、ほぼ2年おきに企画開催されているこのカナダ研修に、私は通訳チームの一員として参加し続けている。今回で4度目の参加となるこの研修で、私はあらためて通訳という仕事の多様性と存在意義について考えさせられた。そこでこのエッセーでは、これまでの私の通訳体験も交えながら、この研修を通じていったいどんなことを考えたかを書き綴ってみたい。

今回の研修には、すでに述べたように26人の参加

者、それに3人の企画者側のスタッフ、そして3人の通訳が日本から参加した。ここで、この3人の通訳者の簡単なプロフィールを紹介しておきたい。まずは30代前半のSさん。Sさんはアメリカ人で、日本の大学院を卒業している。驚異的なリテンション（耳にしたことばを記憶しておく）能力の持ち主だ。最初にSさんと一緒に通訳の仕事をしたとき、メモなど一切取らずに、発言者の発話を8割がた再生してしまう能力に、私は驚きを越えて畏れをなしてしまったものだ。現在Sさんは大阪で、DVや暴力の問題で悩んでいる人たちの相談業務を中心とした支援活動に従事している。その次は、日本生まれだがほとんどの教育を南北アメリカ大陸（コロンビアと米国）で受けた40代前半のNさん。日英両言語をほぼ同等に使いこなすことのできる完璧なバイリンガルだ。Nさんは、自分の日本語が具体的な日常語のレベルでしかなく、抽象的な学術用語にうといことをたえず気にかけているが、聞く側（研修参加者）からすると日常語で通訳をしてくれるのでとても解りやすく、Nさんの通訳はすこぶる評判がよい。現在Nさんは、DVや虐待にあった女性たちの回復のプロセスをサポートするNPOを立ち上げ、その代表を務めている。そしてシンガリが、韓国籍だが日本で生まれ育った50代後半の私だ。私の場合は、多くの日本人と同じように、義務教育の枠組みの中で12歳から英語を学びはじめ、成人の後、（ニュージーランド、英国、米国などの）英語圏の国々で5年間ほど働いたり学んだりした経験がある。そして、現在は日本の企業で企業内翻訳者として働いている。この年代も出自もまったく異なった3人は、同じ主催者のカナダ研修で「通訳トリオ」として何度も一緒に仕事をしてきた間柄だ。

だがすでにお分かりのように、3人とも通訳を生業としているわけではない。私たちは、正規の訓練を受

けて通訳になったというよりも、それぞれが関わっている支援活動あるいは社会運動の過程で必要に応じて通訳という役割を引き受け、実践を積み重ねてきたという共通の背景をもっている。それに通訳といっても、私たちがこなせるのは逐次通訳のみで、3人とも同時通訳の訓練を受けたことはない。日本の同時通訳の草分けであった西山千さんは著書『英語の通訳』（サイマル出版会、1988:114）の中で、「通訳者は、人と人との間のコミュニケーションを円滑に行い便宜を与える専門家である。それはプロの通訳者であろうとなかろうと、通訳する者は、その役目を果たす専門家であるといえる」と語っている。この文脈で言うならば、今回私たちは、暴力や虐待にあった女性や子どもへの支援活動に携わる日本とカナダの女性たちの円滑な交流に便宜をはかるために、自ら進んでこの仕事を引き受けたと言えるだろう。それを「専門家」と呼ぶかどうかはまた別の問題だが、日本のNGO/NPO活動の現場では、できる人ができることをやっていくことでしか物事が前に進まないということはよくある。だから私たち3人にとっては、通訳という仕事が「職務」としてというよりも、あくまでも自分たちの問題意識にそった支援活動や社会運動の一環としてあると言える。たまたまある領域において、他の人たちよりも日英という二つの言語に関しては、それなりの貢献ができる立場にあったのでそれを遂行したというわけだ。

考えてみると、英語が世界における覇権言語になってから久しい。西ヨーロッパに端を発する大航海時代から植民地主義と帝国主義の時代と重なる英語の歴史を、クリティカルに俯瞰する視点を失うわけにはいかないが、すでに多くの分野で英語が共通語として使われている事実を否定することはできないだろう。こうした大きな流れの中で、日本の学校教育においても英語学習へのプレッシャーは高まるばかりだ。実際、あるレベル以上の英語運用能力を持つことが、就職に有利に働くという現実もある。かくいう私自身も、日本語から英語への翻訳能力を買われて上場企業に就職したという事実がある。こうした英語需要の拡大にともなって「英語産業」とでも呼ぶうる領域が生まれたのもまた事実だ。その一番の花形が、国際会議やTV報道で活躍する同時通訳者ではないだろうか。現在私は、週に一回、非常勤講師として某大学で英語を教えている。学生たちにどんな職業に就きたいのかと尋ねると、かなりの数の学生たちが通訳になりたいと応える。だが当然ながら、マスコミに取り上げられるような通訳

者はほんの一握りにすぎず、有象無象の自称通訳者も含めた多くの人たちは多岐にわたる分野で多様な形の通訳業務を行っているのが現実だろう。このエッセーで紹介する私自身の通訳体験もそうした多様性の一つの形にちがいない。

私自身の通訳経験を紹介する前に、通訳という仕事に関して著名な通訳者たちがどんなことを語っているかを少し見ていきたい。日露同時通訳そしてエッセイストとして知られ、一昨年（2006）亡くなった米原万里さんは著書『不実な美女か貞淑な醜女（ブス）』（新潮文庫、1998）の中で、彼女独自の通訳論を展開している。彼女によると、通訳・翻訳には共通の三大特徴があるという。その一つとして、あらゆる面での多様性をあげている。「人間のすることすべて、人間が関わり、そこに異なる言語間のコミュニケーションのあるところはすべて通訳・翻訳の守備範囲といえる」（p.25）と述べている。また多様性の一つの側面として、「ある言語によって表現されたメッセージを他の言語による表現に置き換える営み、要するに通訳・翻訳、あるいは『訳』という言葉で概念規定されている作業の方式は、千差万別多様多岐にわたる」（p.47）と説明している。彼女のこの発言に、私は深く頷くことができる。多様であるからこそ、今回の研修のような通訳トリオの活躍の場が生まれたのだ。私たち3人は、多様多岐にわたる通訳のニーズの中から、自分たち言語能力が役に立つと判断した特定の守備範囲を選択したと言えるだろう。

また米原さんは、二つ目の特徴として「訳はメッセージの送り手と受け手に依存する」（p.59）という点をあげている。「コミュニケーションにおいて、メッセージの送り手と受け手という両主人公の用いる言語が異なるときに初めて三番手の参加者である通訳者、あるいは翻訳者が登場する余地が生まれる。登場するといっても、通訳者や翻訳者は、決して両主人公と同格ではない。決して主人公にはなれない立場にいる」（p.54）と述べるのだ。つまり、送り手と受け手にいつも気を遣いながら、決してでしゃばらず、自分というものを押し殺していかねばならないのが通訳者・翻訳者の宿命というわけだ。これに類似したことは他の通訳者の口からも語られている。西山千さんも先に述べた著書の中で、「通訳という作業は、自分という存在をできるだけ除外しなければならない作業である」（p.125）と明言している。この点に関しては、通訳を依頼された状況によるのではないだろうか。少なくとも

も、私たち3人が参加した今回の研修においては、通訳者がただひたすら「脇役」や「黒衣」に徹していたわけではない。

ここでまた、話を米原さんの翻訳・通訳の三大特徴に戻すことにしよう。彼女は最後の特徴として、「訳というプロセスがとらえどころがないということ、捕獲不可能だということ」(p.61)をあげている。「意味というものは、どうらや、前後関係や、その場の状況、その時点での聞き手の知識、教養などが総動員されて把握されるものらしい」(p.101)と語る彼女に、通訳・翻訳という作業に一度でも携わったことのある人なら、躊躇することなく同意するにちがいない。また彼女は逐次通訳の作業にふれて、その基本的な型として「通訳者の側に、スピーカーの発言をさえぎる権利はない」(p.111)とも語っている。

こうした折り紙付きの通訳者が数限りない経験の末にたどりついた境地には、ただただ感服するしかない。だが実際に、私たち3人の通訳の現場はどうであったかということ、無意識にそして意識的に、先陣によって示された通訳の約束事を裏切りながらの作業だったのだ。最初のタブー破りは、スピーカーの発言をさえぎるという行為だ。研修全体を通じて、事前にレジュメなどの資料が私たちの手元に届くことはなく、当日に担当通訳者が講師と5分程度の打ち合わせをして、後はぶっつけ本番という形で講義は進められた。さらにほとんどの講師が、これまでに通訳付きの講義などしたことがなく、通訳の存在を無視して話し続けてしまうことが多々あり、あえてスピーカーの発言をさえぎって通訳せざるを得なかったのだ。

すでにお気づきかもしれないが、米原さんのようなプロの通訳者の現場と、私たち3人が通訳を務めた今回の研修のような現場では、その前提条件があまりにもちがうのだ。前者には、サービスを買う側と売る側という厳然たる境界線が引かれている。その辺の事情を米原さんは、通訳は送り手と受け手という二人のご主人に仕える「下僕」だと皮肉ってもいる。だが私たちの場合は、研修を主催する側、研修にお金を払って参加する側、そして通訳者と、それぞれ立場のちがいはあるが、女性や子どもに対する暴力の根絶のための支援活動という共通基盤がある。だからこそ、これから紹介するよう出来事が発生する余地があるのだろう。

これまでの研修でもそうだったが、プログラムには必ずマイノリティ女性に関する講座が組み込まれてい

る。だが在日コリアンの私の目から見ると、単一民族・単一言語・単一文化という国民国家幻想の強い日本で生まれ育った研修参加者の多くは、なぜあえて研修でマイノリティ女性の状況を学ぶ必要があるのかが理解できていないように思われた。このマイノリティ女性の講座の通訳は私の担当ではなかったが、講師と研修参加者の受け答えを間近で見聞きしながら、どうにもイラついてしまう私がいた。私には話を聞く側(研修参加者)に、マイノリティ問題を理解するための枠組みが欠けているように思えて仕方がなかったのだ。そうした枠組みの不在によって、講師がカナダ先住民の女性たちの置かれた状況を説明しても、日本の女性たちの問題と関連づけて考えることができずに的外れな応答になっている、と私の目には映ったのだ。当然だが、講義の最中に口を差し挟むことは差し控え、講座の終了後に発言の機会を求め、私の考えを述べ、もし興味のある人がいたらマイノリティ問題について話をしたいと申し出た。結果として、過密なスケジュールだったにもかかわらず、多くの参加者が私の「番外講座」に参加してくれ熱心に耳を傾けてくれた。もしも私が通訳者の役割だけで研修に参加していたら、こうしたことは起こりえなかったはずだ。

ここでもう一つのエピソードを紹介したい。プログラムの中に「癒しの道化術」というコマがあった。私はこのコマの通訳を自ら進んで引き受けさせてもらった。実は「道化」(クラウン)というのは私の通訳体験の原点でもあるのだ。私が通訳らしき業務をはじめたのは1987年にさかのぼる。1983年、リッキー・リビングストンというアメリカ人女性によって、ゲシュタルト・セラピーを志す人たちを訓練する場として「東京ゲシュタルト研究所」が、高田馬場に設立された。友人に誘われ、私はそこでリッキーさんのゲシュタルト・セラピー講座とワークショップの通訳の一人として仕事をするようになった。とはいえ、すでに企業に勤めていた私は、夜のクラスと週末のワークショップ合宿の通訳しか引き受けることができなかった。いずれにせよ、研究所での on-the-job training (実地訓練)を通して、私は通訳学校では絶対に学ぶことのできない、かなり特殊な領域の通訳の手法を学んでしまったようなのだ。

研究所において私に求められたのは、一語一句を正確に訳す通訳スキルというよりも、そこに集う人たちに脅威を与えない(安心感を与えられる)人間存在としての在りようだった。リッキーさんは日本語で講義

をすることは適わなかったが、かなりの日本語の聞き取り能力を持っていたので、事前にすべてを訳す必要はないと告げられていた。研究所にはセラピストを目指す人たちだけではなく、自分の抱えている問題を解決するためにやって来る人たちも多くいた。勢い、ワークショップの場が、魑魅魍魎とした人間の感情と情動がうごめく「修羅場」に化すことも多々あった。今でもよく覚えているのは、参加者の感情が爆発したとき（実際によく起きたことなのだが）、リッキーさんが手で私の通訳を制し、「ことば」で通訳するなどというサインを送ってきたことだ。彼女の関心は、現前の人間の発することばそのものではなく、その人の息づかいであり、存在のありようそのものだったのだ。ゲシュタルトが強調する「いま、ここ」で何が起きているかを理解するためには、ことばだけに注目するわけにはいかなかったのだ。

リッキーさんが独自につくりあげた「クラウニング」というセラピー手法がある。ゲシュタルトにクラウン（道化）のエッセンスを取り入れた手法だ。リッキーさんのクラウニングに関する考え方は、彼女の著書『聖なる愚か者？内なる道化と人生の創造性』（星雲者、1989）に詳細が紹介されている。いずれにせよ、リッキーさんのクラウニング・ワークショップの通訳をしながら、私はそこで繰り広げられる「人間劇」に心底魅せられてしまったのだ。カーテン（幕）に見立てたシートでわか舞台をつくり、参加者全員が舞台上に登場する人とオーディエンス（観衆）の役割を、順番に体験学習していくのだ。参加者は、カーテンの陰から観客の前に出てただそこに立つという、その単純きわまりない行為が、実はとてつもなく難しい行為だということを手早く思い知らされる。なぜならば、そこにその人の全存在がさらけ出されてしまうからだ。他者（観衆）を前にしたとき、多くの人には硬直状態になり、あるがままの自分をエントランス（登場）させることがむずかしくなってしまうのだ。クラウニング・ワークショップは、まさに「自分」という存在そのものを学ぶ場なのだ。ワークショップでは、またよく知られたクラウン（ピエロ）の赤い鼻の威力についても学んでいく。プラスチックの小さな赤い鼻が、それをつけた人の行為すべてを「あたり前」でないものにしていくのだ。赤い鼻をつけるやいなや、瞬時に、日常が非日常に変容してしまう。このワークショップでの通訳の仕事は、ことばを逐一訳していくのではなく、「いま、ここ」で起きていることの中に自分自身を投

入して、ことばを翻訳していくのではなく、そこに漂う「空気」を一つの言語からもう一つの言語に置き換えていくような作業だった。そこで求められたのは、言語運用能力というよりも「共感」（コンパッション）力であったように私には思えるのだ。

こうした私のゲシュタルト研究所での経験が、今回の研修の「癒しの道化術」の通訳につながっていったのはたしかだ。すでにこれまで参加した研修から、フィレタ・フィッシュ（芸名）さんがどんなことをするのかの予備知識はあった。私はフィレタさんとのコラボレーションで、「通訳」以上のことをしてみたかった。赤い鼻をつけてみたかったのだ。赤い鼻をつけることで通訳の「あたり前」を壊したかったのかもしれない。フィレタさんの得意とする芸にジャグリング（お手玉のような曲芸）がある。私もそれに倣って、通訳とクラウン両方の役割をジャグリング（操ることを）したかったのだろう。もちろん、通訳者の役目を果たすために、フィレタさんの発話をちゃんと通訳することも忘れなかった。ただそれにつけ加えて、私自身もクラウンを演じたのだ。クラウニングにおいては即興性がものをいう。私は彼女の発話を逐一日本語に訳しながら、声だけではなく、彼女の動きをシャドーイング（耳にした音をそのまま真似ていく通訳の訓練法）の要領で真似ていった。彼女は私の意図をすぐにキャッチして、そこからは二人のクラウンの登場となり、二人の即興劇がはじまっていったのだ。次第に二人の呼吸と歩調が合い、掛け合い漫才よろしく「ボケ」と「ツッコミ」のリズムがごく自然に生まれていった。発話の主演はあくまでもフィレタさんだが、通訳クラウンの私はことばだけで通訳せず、そこに身体表現の通訳をつけ加えていったのだ。そしてフィレタさんは、私を小道具の一つとして器用に使いこなすことで、彼女がこれまで培ってきた道化術の数々を披露していった。またクラウンの大事な役目の一つは、観客とのつながり（コンタクト）をつくっていくことだ。フィレタさんはジャグリングよろしく、私と観客を、文字通り手玉に取りながら、参加者すべてを笑いの渦に巻き込んでいった。私たちのコラボレーションは大成功だった。

フィレタさんのコマは、「癒しの道化術」の実践と理論、そして大道芸の实地訓練という三重構造だった。理論編は、彼女が本名のサンドを名乗ることからはじまり、現在の彼女の「子ども病院」での治療的道化師としての仕事の説明と、カナダにおける治療的道化師

の歴史の解説という構成で進められていった。この理論編では、私は赤い鼻を外し、サンドさんの発する情報をなるべく正確に通訳することに専念した。

私は、通訳のタブーに挑んだ自分自身の奮勇ぶりを吹聴したくて、ここで自らの体験を紹介したわけではない。そうではなくて、「人間のすることすべて、人間が関わり、そこに異なる言語間のコミュニケーションのあるところはすべて通訳・翻訳の守備範囲」という前提に立ったとき、これまでの通訳の概念だけではこぼれ落ちてしまうものがあるということを伝えたかったのだ。すでにプロの通訳者は、世界中のあらゆる分野で通訳という仕事をこなしている。また、通訳を生業とする人たちは、多岐にわたるジャンルをこなさないと職業として成り立たないという現実もある。そして多くの通訳者が、通訳という仕事が「頭脳労働」であると同時に「肉体労働」でもあることを指摘している。西山千さんも、「通訳に必要な集中力とすばやい頭の切りかえは、体力の支えがあってはじめて可能である」(p.65)と、通訳がいかに肉体労働の要素を含んでいるかを強調している。

だが私には、自分自身の通訳体験を通じて、頭脳労働と肉体労働だけでは捉えきれない何かがあるように思ってしまうのだ。1990年代に入ってから、たびたび日本を訪れ数多くのワークショップを行った今回の研修のコーディネーターであるカナダ女性の通訳を、私は何度か務めたことがある。あるとき彼女が私に、「あなたとは安心して仕事ができる。ワークショップでどんな感情が吐露されても、それをそのままちゃんと受けとめてくれるから」と、洩らしたことがある。そして、彼女がプロの通訳者と仕事をしたときのエピソードを話してくれた。そのときは、通訳者がワークショップで披瀝された感情の激風に怖気づいてしまい、ワークショップそのものが成り立たなくなってしまったというのだ。この話を聞いて、私は考え込んでしまった。いったい私の中の何が、彼女に安心感を与えたのだろうか。私は自分の通訳者としての力量にたえず自覚的でありたいと思っている。たとえば、研修の通訳トリオの二カ国語運用能力にはかなりの開きがある。私の英語運用能力は、他の二人の実力と比較すると、かなり見劣りがする。これは謙遜などではなく、事実としてそうなのだ。だとすると、それを補完する何か私の側に備わっていないければ、研修において「トリオ」としての通訳作業は成り立たないことになる。

実は私はこのエッセーを書き進みながら、リッキーさんの通訳をしていたころのことをあれこれ思い出していた。そんな中で、私を評した彼女のあるコメントを思い出した。それは「あなたは他の研究所専属の通訳たちよりも通訳技術は劣るけれど、あの人たちにはない何かがあるから私はあなたを使いたい」というものだった。私には、それがどうもEIつまりemotional intelligence（日本語だと「感情的知性」とでも言うのだろうか）と関わりがあるように思えるのだ。この感情的知性は5つの要素から構成されるが、その一つの要素に、他者の感情に気づきそれに寄り添おうとする心性を意味する「共感力」があるからだ。ここまで考えてくると、身体や知識だけでなく感情の移入を必要とする労働を意味する「感情労働」の存在が視野に入ってくる。これまで私が通訳の仕事をしてきたワークショップのような現場は、「感情労働」的要素が大きいにちがいない。だからこそ、私の頭脳労働者としての弱点を、感情労働者としての強みで補完することで、私は与えられた通訳の仕事を行なうことができたのではないだろうか。とはいえ、私にとっての通訳トリオの仕事は、「感情労働」的側面の強い相談業務に携わるSさんとNさんのような、肉体労働者、頭脳労働者、そして感情労働者としての一級の素質を備えた人たちに支えてもらった部分大きい。

正直に告白すると、研修の通訳を頼まれるたびに悩んできた私がいる。西山千さんは、「通訳者は、自分の能力以上の仕事を引き受けてはならない」(p.118)と警告を発する。こうした警告に、私は毎回たじろいでしまうのだ。だがこんな風に逡巡していたのは、私だけではなかったようだ。後で知ったことだが、SさんもNさんも同じように悩んでいたらしい。そして、それぞれが「あの3人一緒の通訳なら」と、通訳の依頼を引き受けてきた経緯があるようなのだ。でも考えてみると、私たち3人に、たとえば「世界原子力会議」の主催者から、通訳の依頼がくることはあり得ないのだ。私たちに通訳のお声がかかるのは、私たちがすでに関わっている社会活動での通訳の仕事なのだ。その限られたジャンルにおいて、私やSさんやNさん以上に役に立つ人（頭脳労働者）がいれば、その人を有効利用していけばいいのだ。私には、次回の研修の通訳を頼まれたら、また3人が同じように「イエス」と応えてしまうような気がする。その一番の理由は、研修から私たち自身が多くのことを学べるからだ。そして、世界中の同じような志を持った人たちとつながってい

たいという欲望を、私たち3人が共有していると感じているからでもある。そういえば、今回の研修を束ねるキーワードは「つながる」だった。現在、私たちが生きるこの地球上には、多種多様な言語が存在している。そして、異なった言語をつなぐ通訳という仕事は多様化されており、これからも多様であり続けるだろうし、また多様であり続けるべきなのだ。だからこそ、私はこう考えるのだ。「赤い鼻をつけた通訳がいてもいいのだ」と。